

### 球磨地域における雨よけキュウリの作型と品種選定

夏秋キュウリの雨よけ栽培において、収量を向上するには、8月中旬を境に植え替える短期2作栽培がよい。いずれの作型でも、穂木品種は「ステータス夏」、台木品種は「ART一輝」が適している。

農業研究センター 球磨農業研究所(担当者:本岡 圭)

### 研究のねらい

球磨地域では、近年半促成ハウスメロンの後作に、雨よけキュウリの作付けが増えつつあるが、品種の絞り込みがなされておらず、また盛夏期の栽培となるため、収量、秀品率とも低いのが現状である。

そこで、当地域における適正な作型を明らかにするとともに、作型ごとの品種を選定する。

### 研究の成果

1. 雨よけ栽培において、栽培期間を延長しても草勢の低下により収量は伸びず、短期2作栽培を行ったほうが商品果収量は優れる(図1)。
2. 短期2作栽培のいずれの作型においても、株当たりの商品果本数、秀品率は、穂木品種は「ステータス夏」、台木品種は「ART一輝」が優れ(表1)、2作合わせて10a当たり20tの商品果収量が望める(図2)。
3. 短期2作栽培では、植え替え作業に10a当たり220時間ほど要するが、収量が5tほど多く得られるため、粗収益は110万円高くなる(表2)。

### 普及上の留意点

1. 摘芯栽培での結果であり、主枝を1.5mの高さで摘芯し、子づるを2節、孫づるは半放任にする。
2. 「ステータス夏」は側枝どり主体の品種であるため、孫づるの摘芯は軽く行い草勢の維持を図るとともに、大葉であるため適度に摘葉を行い採光性を良くする(表1)。
3. 「ステータス夏」はうどんこ病、褐斑病の発生は少ないが、草勢が低下するとべと病の発生がみられる。

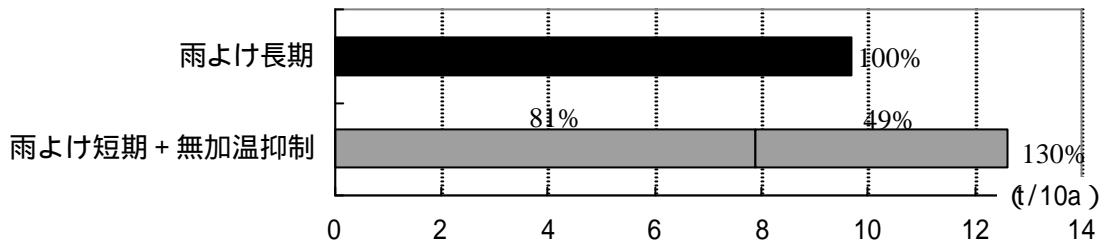


図1 作型ごとの商品果収量の比較 (平成12年度 品種はステータス夏 + ニュースーパー-雲竜)  
 図中の値は雨よけ長期の収量を100としたときの相対値 (%)  
 収穫期間 雨よけ長期：6月下旬～9月中旬  
 雨よけ短期：6月下旬～8月中旬 無加温抑制：9月下旬～11月下旬

表1 品種ごとの生育・収量・品質 (平成13年度 雨よけ短期栽培)

穂木	+ 台木 <sup>1)</sup>	最大葉		主枝の 雌花着生率 (%)	商品果本数 (本/株)	秀品率 (%)
		葉長 (cm)	葉幅 (cm)			
ステータス夏	+ 雲竜	30	29	39	67	47
ステータス夏	+ ART	31	30	44	73	48
アルファ-節成	+ ART	29	27	91	51	34
オーシャン	+ ART	27	26	37	56	35
大吉	+ ART	29	29	50	63	49
つばさ	+ ART	31	31	36	73	42

注1) 雲竜は「ニュースーパー-雲竜」、ARTは「ART-輝」の略である (以下同様)

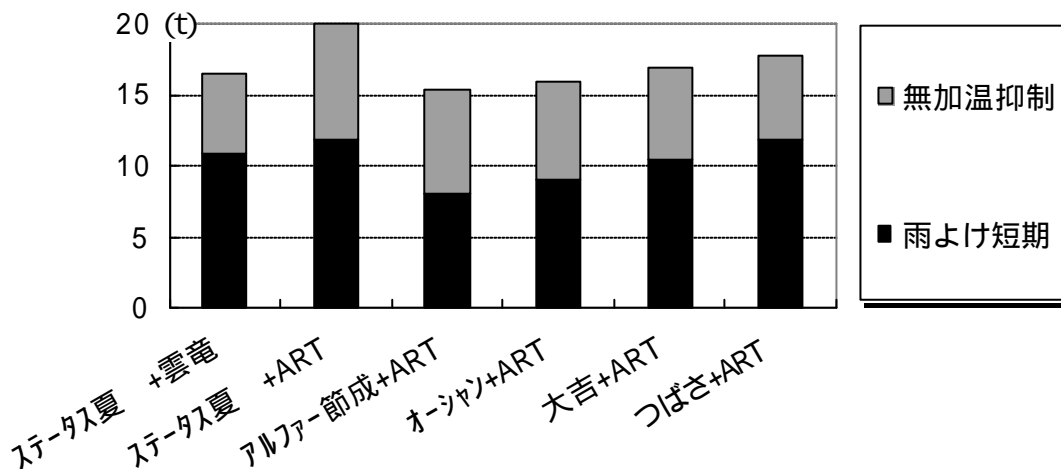


図2 各作型における10a当たり商品果収量 (平成13年度)  
 栽植様式 うね幅 2m 株間70cm、2条植え (1,430株/10a)

表2 各作型における収益性比較 (10a当たり)

	植え替えに係る		商品果収量 (t)	単価 (円/kg)	粗収益 (万円)
	労働時間 (時間)	労賃 (万円)			
雨よけ長期	-	-	15.4	239	368
雨よけ短期 + 無加温抑制	222	17	20.0	239	478

植え替えに係る労働時間は、前作の片づけから後作の育苗、定植までの労働時間。  
 労働時間、労賃、単価は県農業経営指標より引用。  
 雨よけ長期の収量は、図1の相対値を基に試算